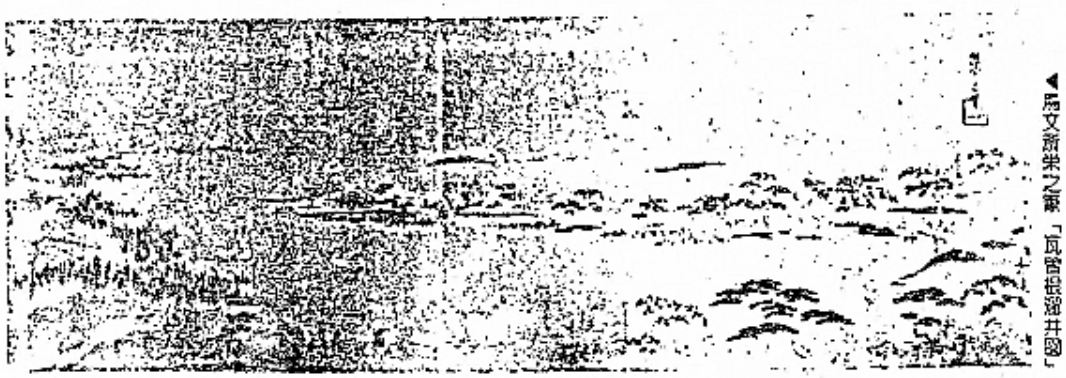
第20回 越谷市民文化発表会

越谷市郷土研究会　出品紹介

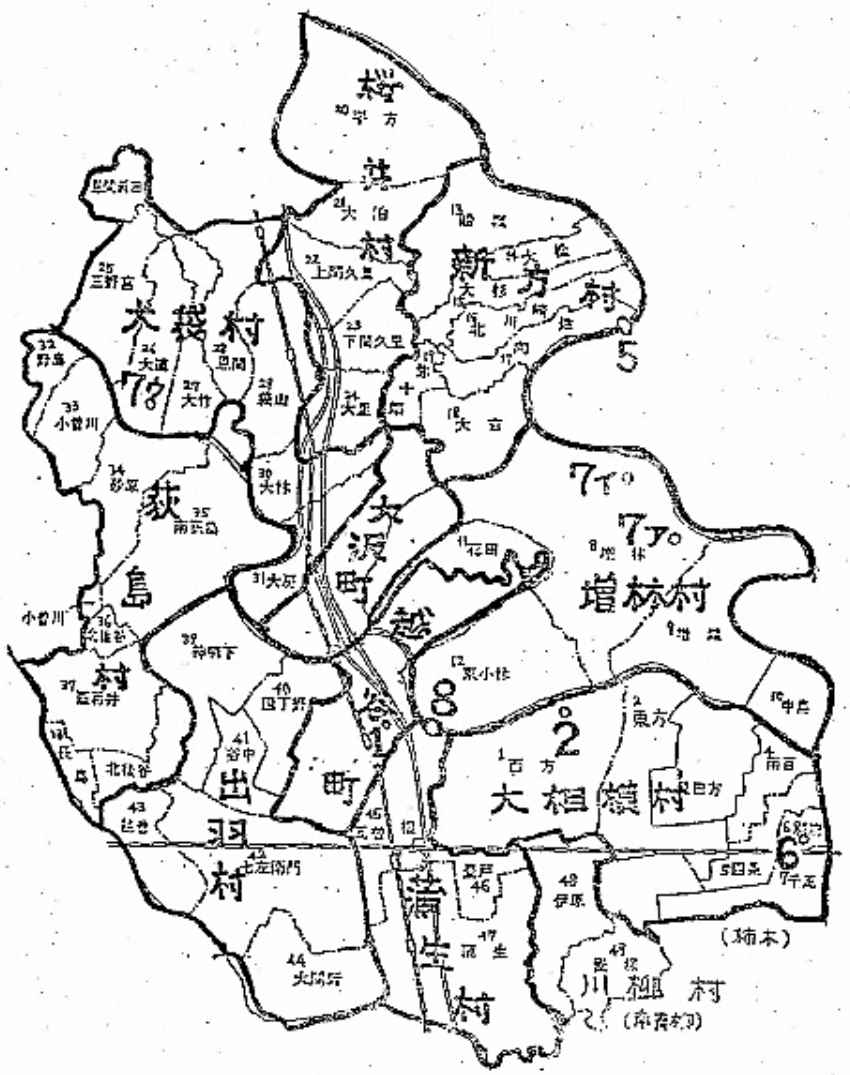


◀国文学新集之第「河骨根源井図」

63年度

市民発表会　出品目録

番号	題名	出品者	電話
1	天下泰平　御百姓	石塚吉男	(七四)三二一七
2	西方大聖寺保管の板碑紹介	加藤幸一	(七四)〇三四四
3	迅速図で見る明治初期の越谷	木原徹也	(六四)二一一一 環境保全課
4	大宮氷川神社に奉納された越谷ゆかりの額	鈴木秀俊	(六四)一〇〇九
5	堂面渡しの架橋	高崎力	(七六)三九八七
6	別府金剛寺蔵の聖徳太子像	丸田冨夫	〇三(九六九)三四四一
7	寛政五年三月の諸国廻国供養塔など	宮川進	(七五)九一三九
8	越ヶ谷八景の今昔	山田政信	〇三(九〇六)〇七三五
	越谷全図(1～8)所在地明示	木原徹也	



「天下泰平」御百姓」の枠軸

石塚　吉男

この一軸は江戸中期の頃のものと思われ、日光道中、越ヶ谷宿新町で、当時、米問屋を営んでいた、石塚屋喜兵衛家に伝えられたものである。これは米商である喜兵衛が正月元旦の恵比寿掛け、恵比寿大黒の版画と共に掲げたものと思われる。

徳川幕府は、原則的に鎖国政策をとり、内政は、士・農・工・商の階級制度に見られるように、武士を行政官とした武家政治を布き、財政的には「米」を主とした農本主義を根幹とした。従って支配階級である武士の次に米及び食糧を生産する農民を上位に、事実上経済の中心となる工人、商人を下位に置いて、「天下泰平、御百姓」と誇称したのである。

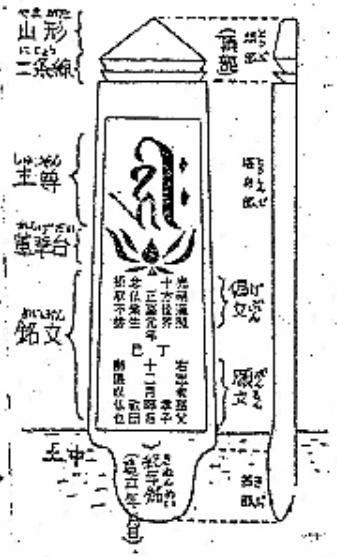
然し、時代の推移により鎖国下の泰平は、相対的に武力の低下を来し、封建的な農本主義は財政の窮迫をもたらし、国内政情不安と欧米諸国の圧力により鎖国の止むなきに至り、「新しい」わゆる明治維新を迎えたのである。

※ 越ヶ谷新町の米穀商石塚屋喜兵衛については「越谷の歴史物語」第三集の一二四ページ参照のこと（現 越ヶ谷二丁目二一二六）

2 大聖寺保管の板碑紹介

越谷市 平方 会野川 39-5 加藤幸一

1. 板碑とは



板石塔婆とか青石塔婆とも言われる板碑は右図のような石でできた供養塔である。自分の死後の冥福を祈る逆修供養、あるいは死者の冥福を祈る追善供養のために建てたものである。板碑は中世に始まって中世に終るといわれるように、鎌倉時代中頃から室町時代後半にかけて造立し、わずかであるが近世にはいって安土桃山時代の慶長年間までみられる。江戸時代以降の造立は全くとだえてしまう。

板碑の特色は次の4つがあげられる。

①頂部は三角形（頂部山形）になっている。

②頂部の下に二本の切り込み線（二条線）がはいっている。

③一個の石材で作られている。県内では秩父で採れる緑泥片岩（秩父青石）を使用している。

④一面のみに刻まれている。裏には何も刻まれていない。

右上の図を説明すると次の通りである。

主尊 --- 拝む対象としての仏さま。
この場合は阿弥陀仏をあらわす種子キリークである。わずかであるが種子でなく図像で描かれている場合もある。

蓮華台--仏さまを安置するための蓮の花でできた台。

偈文 --- 経典からとった一節。仏を讃えたり、仏法の真髄を述べたりしている。この場合は観無量寿経という経典からとった4句からなる偈文である。「偈」とも言う。

願文 --- 願いごとの文、つまり造立趣旨である。
この場合は「若忌者　慈父幽儀成仏也　孝子敬白」と刻まれていて、子が父の追善供養のために造立したとわかる。

紀年銘--刻まれた年月日をさす。ここでは板碑を造立し、供養した年月日を表わす。「正嘉元年丁巳十二月晦日」

2. 板碑の本場　埼玉県

最古の板碑が荒川流域近くの埼玉県江南村の大沼公園弁天島で発見されるなど、ごく初期の板碑が埼玉県大里郡・北埼玉郡・北足立郡の荒川に近い地域に分布していることから、板碑の発祥地は荒川中流域と考えられている。その板碑の石材として、荒川上流の秩父地方で採れる、板状にはがれやすい性質をもつ緑泥片岩が利用された。これらの板碑を武蔵型板碑といい、埼玉県内を流れていた当時の荒川流域を中心に、埼玉県の他に東京都全域、群馬・栃木・茨城の各県の南部、千葉県の西部、神奈川県の東部などに分布している。これらは全国でも最も形態が整っていて、最も多くみられる。つまり、武蔵型板碑は質量とも全国一を誇っているのである。特に埼玉県は板碑の本場といえる。埼玉県教育委員会が昭和51年10月から56年3月までの5ケ年間の月日をかけての板石塔婆緊急調査によると、昭和55年9月30日現在で20,201基を確認している。

3. 越谷市の板碑

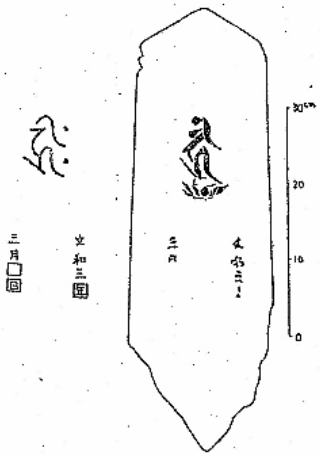
板碑は川を利用して各地に運ばれたと考えられている。越谷市内を貫通している元荒川は当時の荒川上流であったため、市内各地に板碑が豊富にみられる。昭和44年発行の「越谷市金石資料集」によると、九十六基及び破片四十数個が確認されたという。その後もかなり発見されていよう。再調査が必要である。

4. 大聖寺保管の板碑

現在、大聖寺では11基保管されている。[illegible]不明である。11基のうち3基は[illegible]に紹介する。

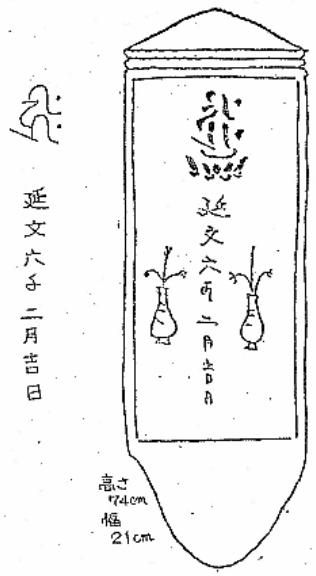
No.1 文和三年(1354)弥陀一尊種子板碑

蓮華台に載った主尊の種子キリークは荘厳体で刻まれている。蓮華台の上部には花心を描いた跡が一部残っている。紀年銘の「文和」は関東に一般にみられる北朝の年号である。なお、南朝では正平九年にあたる。この板碑の表面はかなりすり減っていて、銘文の判読が困難である。中央には文和三年三月に逆修供養（生前に自分の死後の冥福を祈る）した人の法名（仏門に入った人や死者に授ける名前）が刻まれていたと思われる。この板碑は西方番場の斉藤正雄氏の所有である。



No.2 延文六年(1361)弥陀一尊種子板碑

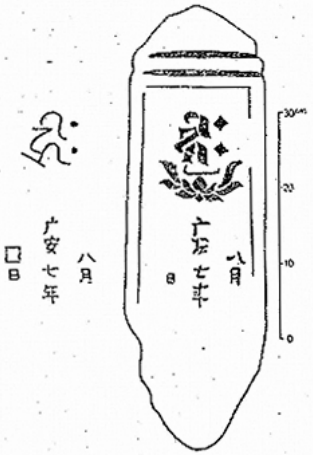
この板碑は現在所在不明である。「越谷市金石資料集」三十ページに記載されている図版によると、荘厳体で刻まれた主尊キリークと、それを載せた蓮華台が描かれている。蓮華台上部には花心がみられる。紀年銘の「延文」は北朝の年号である。紀年銘の両脇に一対の華瓶（仏前に花を供える時に使う入れ物。普通、金銅製の胴張りの壺で模様のないものが多い）がみられる。それぞれ三本の茎が描かれている。このように双式の華瓶の場合は三茎が一般的である。また、華瓶がともに徳利形に描かれているが、これは初期のものによくみられる。なお、花も初期のものは、きちんと蓮の花を描くものがある。のち、花や華瓶がかなり簡略に描かれるようになる。塔身部には回りに郭線がみられる。



※この図版は越谷市金石資料集三〇ページに載っているもの。

No.3 応安七年(1374)弥陀一尊種子板碑

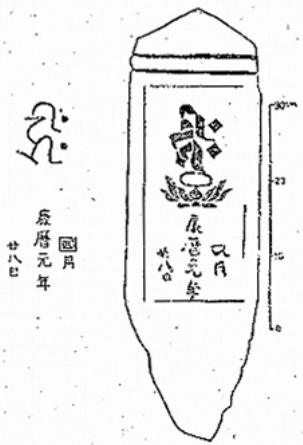
主尊・蓮華台ともV字形に深く彫る薬研彫で刻まれている。主尊キリークは荘厳体で書かれている。荘厳体は比較的初期に多くみられる。蓮華台の上部には花心が描かれているのがわかる。蓮華台の下の「応安」は北朝の年号である。その向かって右側には「八月」が刻まれているが、左側は日にちが刻まれていたと思われる。塔身部には回りに郭線がみられる。この板碑は西方番場の斉藤正雄氏の所有である。



No.4 康暦元年(1379)弥陀一尊種子板碑

蓮華台に載った主尊のキリークは荘厳体で刻まれている。蓮華台の上部には花心が描かれている。紀年銘の「康暦」は北朝の年号である。塔身部には回りに郭線がみられる。

No.1、No.3、No.4 の三基の板碑は、西方の番場の斉藤材木店主斉藤正雄氏（相模町六丁目五六四の一）所有のもので、昭和六十二年二月頃に大聖寺に保管される。これら三基の板碑の発見のいきさつは、大聖寺所有だった杉のはえていた護摩木山と称する地（相模町六丁目四九四あたり。もと金剛寺の山林か？）を昭和三十五・六年頃に開墾した時に出土したものである。現在の護摩木山の地は宅地となっていてその名残りは全くない。



No.7 文安四年(1447)弥陀三尊種子板碑

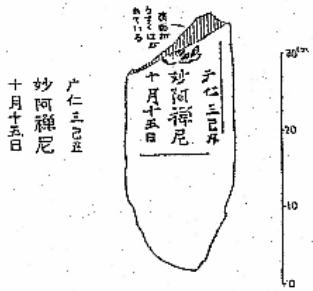
花心も描かれている蓮華台の上に載る主尊 (キリーク・弥陀)の他、その左右下に脇侍(主尊の左右に侍しているもの)である (サ・観音)と (サク・勢至)のあわせて三尊が刻まれている。銘文が書かれている中央には男性の法名とその下に年号・月日が、また左右には観無量寿経の偈文が刻まれている。この偈文については No.6 の解説文を参照のこと。法名の中の位号である「禅門」(男性)、「禅尼」(女性)は板碑によくみうけられる。鏡因禅門が文安四年四月二十七日に逆修供養したものであろう。

No.5 永徳二年(1382)弥陀一尊種子板碑

主尊キリークや蓮華台は彫刻で刻まれている。蓮華台の上部には花心も描かれている。紀年銘の「永徳」は北朝の年号である。永徳二年は南朝の年号では弘和二年にあたる。銘文の刻まれる中央には、永徳二年五月二日に逆修供養(生前に自分の死後の冥福を祈る)をした人の法名が縦に書かれていたと思われる。

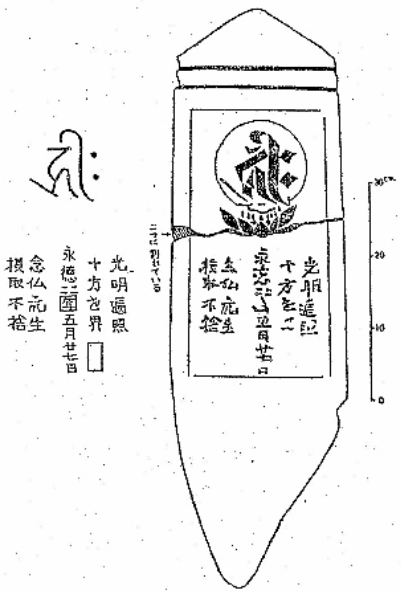
No.8 応仁三年(1469)一尊板碑

上部が欠落していて主尊は不明。描かれている蓮華台の位置により、一尊板碑であることがわかる。また、郭線がみられる。中央に刻まれている法名は、位号が禅尼であるから女性である。位号をみなくても法名の中に「妙」の字があれば女性の法名であるとわかる。また、法名の中に阿号(南無阿弥陀仏の「阿」をさす)がみられるので時宗板碑の可能性が充分ある。すると、時宗を信仰する女性信者が応仁三年己丑歳の十月十五日に逆修供養したものであろう。



No.6 永徳四年(1384)弥陀一尊種子板碑

主尊と銘文との間で真っ二つに割れているのが残念である。主尊側をみると、花心も描かれている蓮華台の上に主尊キリークが刻まれ、しかも主尊の回りに月輪と呼ばれる円がとりまいている。銘文側は、「永徳二年五月廿七日」と刻まれた紀年銘が中央にあり、その両脇には光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨という偈文(経典にある詩文で、仏を讃えたり、仏法の真髄を述べたりしたもの)が刻まれている。大意は「阿弥陀如来の光明は遍く 十方世界を照らし 念仏を唱える人々を 摂取して捨てたまわず」この偈は観無量寿経からとった経文で弥陀板碑にしかみられない。この板碑の塔身部には回りに郭線がみられる。



No.11 明応八年(1499)弥陀三尊種子板碑

主尊のキリークと脇侍のサ・サクの種子はそれぞれ月輪に囲まれ、蓮華台に載っている。三尊の上には天蓋（仏さまを覆う日傘のようなもの）があり、その天蓋の両端から飾りが垂れ下がっている。塔身部の左右の側には縦に光明真言と呼ばれる真言（密教で唱える呪文で梵字で表わす）が刻まれている。

オン アボキャ ベイロシャノ マカボダラ マニハンドマ ジンバラ ハラバリタヤ ウンバンコ

大意は

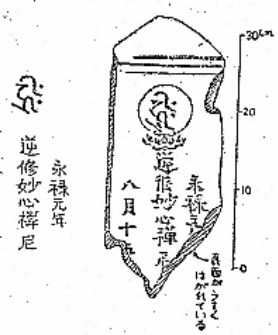
霊験空しからざる遍照如来（大日如来）に帰命し奉る。大印ある者よ宝珠と蓮華と光明の徳を有する者よ、転迷開悟せしめ給え。ウン。

また、銘文をみると法名が鏡願禅門という男性が明応八年己未歳の十月十二日に逆修供養したのであろうとわかる。

No.12 永禄元年(1558)弥陀一尊種子板碑

主尊キリークを月輪で囲み、その下には蓮華台が刻まれている。この板碑は後期のものであるから、種子の彫りが初期のようにV字形に深く彫る薬研彫ではなく、浅い彫りとなっている。力弱い彫りではある。銘文を読むと、法名が妙心禅尼という女性が永禄元年八月十五日に逆修供養したことがわかる。

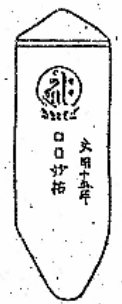
さて、この板碑の最大の特色は、彫られた主尊や蓮華台・銘文に埋め込まれた金が四百年以上も落ちずに残っていることである。このことは大変めずらしい。当時は彫ったあと、表面に何が刻まれているのか一目でわかるように金などを埋め込んだのであろうが、その名残りをこの板碑にみることができる。この板碑を発見したいきさつは大聖寺本堂裏手の一部を畑にしようと堀り起こした所、昭和62年2月頃に偶然にみつかったものである。板碑の表面を伏せられた状態で掘り出されたためか金が今日まで落ちずに残ったのであろう。当時の名残をよく残している貴重な板碑といえる。

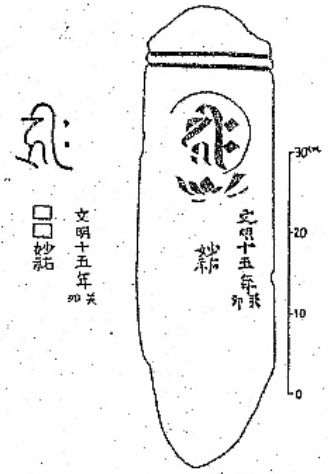


No.9 文明十五年(1483)弥陀一尊種子板碑

蓮華台の上に主尊キリークが載っている。主尊の回りは月輪で囲まれている。紀年銘は「文明十五年癸（癸）卯（卯）」と刻まれている。向かって左端には月日が刻まれていたのであろう。中央には法名が刻まれている。法名の中に女性がよくつける「妙」の字があるのでこの法名は女性である。□□妙祐という女性が文明十五年に逆修供養したものであろう。

※「越谷市金石資料集」の五十ページには右の図版が載っているが、紀年銘の中で「癸卯」の干支が記載されていない。





No.10 文明年間弥陀三尊種子板碑

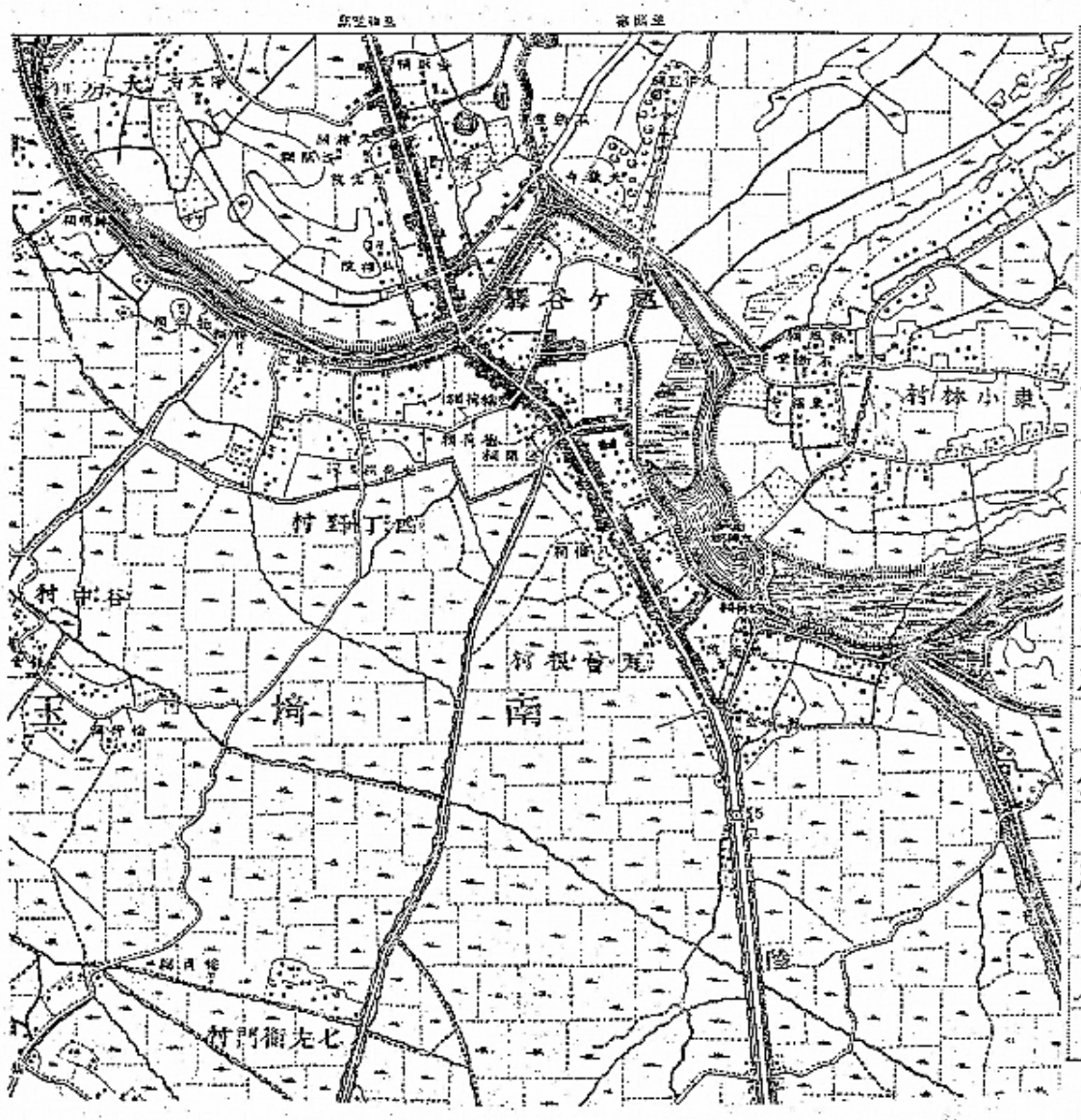
蓮華台の上に載る主尊キリーク（弥陀）と、その脇侍サ（観音）・サク（勢至）がそれぞれ回りを月輪に囲まれている。右図は「越谷市金石資料集」の五十一ページに載っている図版である。今（昭和63年9月）の板碑はかなりいたんでおり、向かって右の側面から下にかけて表面がうすくはがれ、文字が消失している。しかし、この金石資料集の図版によって法名が道仲妙□と呼ばれる女性が文明年間の四月二日に逆修供養したのであろうことがわかる。

③ 迅速図に見る明治初期の越谷

ここに掲示した地図は、明治初期に測量された「越谷駅」（明治十三年測量）「流山村」「粕壁駅」「岩槻町」の四枚の迅速図を貼り合せたものです。

迅速図とは、明治初年、参謀本部陸軍部測量局が軍事上の必要性から、近代的な測量技術を用いて作成した、縮尺二万分の一の地形図で、江戸時代までの「絵図」と比べ精密さと正確さは飛躍的に向上したものとなっています。（ただし三角測量の成果を待たずに測量に入ったため、経線・緯線は入っていない）

この迅速図に描かれた明治維新十数年後の越谷周辺の姿は、そのまま江戸時代の様子をとどめているとも言える貴重な地図と言えます。この迅速図からお判りのように、現在とはずい分違っており、例えば、JR武蔵野線や四号国道（バイパス）はもちろんのこと、東



武鉄道や県道足立越谷線（旧四号国道）も無く、河川や道路の姿も微妙に違っております。それに住宅化の状況は文字通り今昔の感があります。右側の現在の地図とも対比しながら一世紀の越谷周辺の変貌をお楽しみ下さい。

水原徹也

4. 氷川神社に奉納された越谷ゆかりの額

鈴木　秀俊

大宮市の武蔵一の宮、氷川神社の参道を御本殿に向って進み、三の鳥居をくぐると、すぐ右手に古色蒼然とした神楽殿があり、その隣の古い建物が、この額の掲げられている額殿です。

額の大きさは、縦、一、五米、横、二米あって奉納額中では最大級のものです。

額の文字は隷書体で、上部に奉献、氷川神社、太々神楽奏上拾週年記念と横書され、その下に太々講有志連名表とあり、寄進者名が細かく書かれて、その数二六七名（市外八四名含む）になります。

世話人

定使野、中村徳次郎、横川浦太郎、前波、中野米蔵、大吉、小林要、向畑、浜野助四郎、川崎、坂巻権兵衛、花田、黒田藤次郎、小林、浜野佐四郎、赤岩、小金井常太郎、中村清蔵、

川藤、山崎再太郎、廣島、森田敬司、坂巻友吉、十一軒、山崎保太郎、増林、須賀年太郎、発起人

定使野、小沢長内、六沢、鈴木正康、越谷、松村貞助、城ノ上、関根甚蔵、

埼玉県南埼玉郡増林村　講元　鈴木治助

額作者　越谷　篠原林木店

昭和九年三月二十五日　鈴木正康謹書

と記されています。

越谷地方から氷川神社に奉納されて現存する唯一の額としてここに紹介致します。

連絡先　六四一一〇〇九

写真　山田　政信

お願い

「越ヶ谷八景」の写真・図等は現在散逸しており発見も困難です。資料及情報等をお持ちの方がおりましたら、当会にご連絡いただければ幸いです。次回の文化祭の資料といたしたく、よろしくお願いいたします。

越谷市郷土研究会

5 堂面渡しの架橋

高崎 力

古利根川、元荒川、綾瀬川の流れる越谷の道路は、今でこそ橋によって他市町と結ばれているが近年まで泉羽街道（日光道）を除き人馬の通行は渡し舟によるところが多かった。このうち古利根川筋の渡舟場としては平方渡（対岸は藤塚）戸崎渡（赤沼）大杉渡（大川戸）堂面渡（松伏）増林渡（上赤岩）増森渡（下赤岩）などがあった。中でも明治以降県道となった岩槻―野田線にかかる戸崎渡、旧国道十六号線（大沢―野田線）と県道平方―足立線を結ぶ堂面渡は比較的通行量の多い渡し場であった。

戸崎渡場

江戸末期から地元の小早川家が渡場を運営し、対岸の赤沼（現春日部市）には小屋を建て仲間二人を常駐させていた。渡し舟は一間×三間の人船と平板造りの馬船の二隻を常備し竹竿で漕いでいた。対岸から声が掛かると迎えに行く不定期便で、渡し賃は明治期で人二～三厘、馬三～四厘、荷三～四厘であったが大正期から値上げし昭和期になると人一銭、馬三銭、自転車二銭リヤカー三銭となった。勿論課税対象である。戸崎渡しは昭和九年春の古利根橋の架橋まで運行していた。本道の古利根橋は、その後の県道の拡巾舗装直線化により取壊わされ上流七十米に新たに鉄筋コンクリート橋が完成したのは昭和三十一年三月である。今では渡場風景もうすれた。

堂面渡場

向畑渡しともいわれるが旧新方村大字向畑字堂面にあったので堂面渡しと呼ばれていた。堂面とは近くに観音堂があり堂に面した場所からの地名といわれている。渡場といわれる屋号の鈴木家が代々渡場を運営し、鈴木す似さんは六代目の女船頭を務めていた。渡し舟は近くの聖徳寺の赤榜を用材とした一間×三間程の舟で対岸に客が来て呼声が掛かると迎えに漕いで行った。水量多く流れの急な夏場は上流に向かって竿で漕がないと下流に流されて対岸に着けないので、後に両岸を八番線の針金で結び舟の導線として竹竿で漕いでいった。渇水期や冬は流れのあるミオまで道を造って渡ったので川巾が狭く楽であった。市域の各渡船場の渡賃は川巾や流れや通行量によって多少の相違があったが昭和期の堂面渡しでは人二銭、自転車三銭である。なお利用の多い新方地区の方からはいちいち渡賃をいただかず舟石といって秋の収穫期に一軒あたり玄米三升（半年分）麦の収穫期に麦三升（半年分）をまとめていただくなど地元民の便宜を図っていた。

堂面渡しがもっとも賑わったのは昭和十二年から同十六年までである。この頃、全国的にハイキングブームが起こり、東武鉄道では越ケ谷水郷ハイキングコースを設定し宣伝したので休日には東京方面から多数のハイカーが訪れた。コースは越ケ谷駅―元荒川―逆川―古利根川―堂面渡―大川戸―赤沼―戸崎―武里駅である。休日には渡場である鈴木家は家を開放して休憩・昼食の場所としたり、特別便として遊覧船を仕立て大川戸まで遡航した程である。戦後も渡船は引続き運行し、昭和

三十年前後には全国的にも渡船場が少なくなり、堂面渡場風景が市販カレンダーに掲載されると多くの画家やカメラマンが訪ずれるようになった。

堂面橋の架橋

新方村を始め十の町村が合併して越谷町が誕生したのは昭和二十九年十一月三日。この合併に先だち新方村では、桜井村、大袋村との三か村合併論、松伏村との二か村合併論、更に十か町村による大同合併論などが持上がり、この論議の過程で堂面橋の架橋論が浮上した。この合併論は後に十か町村による大同合併に結着し、昭和二十九年九月には越谷町新町建設計画書が作成された。その中の要望書として「旧新方村より北葛松伏村への交通は古利根川の渡船により行われているが、野田方面との交通の便を考え県道越ケ谷野田線と桜井吉川線とを結ぶよう古利根川に架橋せらるるよう要望する」とうたわれた。架橋工事にいたるまでのいきさつについては当時の昭和三十一年十一月六日付の埼玉新聞には、「この橋は一昨年秋、旧新方村が越谷町合併の際新設を公約したが実現出来ず、昨年秋地区民大会が開かれるなど問題を起した」とあり、架橋工事の概要として「越谷町は新方向畑と松伏町松伏間古利根川船渡し場の架橋を計画していたが、自衛隊古河駐屯部隊の機動力を要請、架橋工事を二十二日着工することになった。自衛隊は架設演習という名目でクレーン、ブルトーザなどと隊員六十名を動員、新方花向院に宿泊して突貫工事を行うが、業者の倍も速く、来月中旬頃完成の予定、経費もガソリンその他消耗品代だけで済み、二、三割安いという」と報じている。このようになった経緯については行政文書を調べなければ詳らかにできないが、思うに地区民の願望と町村合併の際の公約、新町建設時の財政難と自衛隊の架設演習等が絡み合った所産といえよう。架橋工事の概況については聖徳寺住職稲葉頑孝氏の資料によると、当時の予算総額二百万円、うち工事費百八十万円。工期は三十日間。昭和三十一年十一月二十三日工事開始。陸上自衛隊古河南自衛隊員六十名は太子堂、清浄院、観音堂に分宿し、地元婦人会員が早朝二時より炊事に当るなど地元総ぐるみで協力し、昭和三十一年十二月二十八日には堂面橋開橋祝が盛大に催され、ここに地元民の熱い願いが達成されたとある。

新堂面橋

本造の堂面橋は、その後交通量の増大、車輌の大型重量化、市道の拡巾鋪装、および橋自身の老朽化により取壊わされ、昭和四十一年三月、同地点に新たに鉄筋コンクリートの堂面橋が完成したのでその姿を消してしまった。

その昔、故郷を後に親に送られて堂面渡しを渡った丁稚奉公の少年たち。隣村へ渡し舟に揺られて嫁いでいった花嫁さん。帰り舟に乗って故郷の土を踏むことのできなかった兵隊さん。悲喜こもごもの人生を乗せた渡し舟も、そして架橋物語を秘めた旧堂面橋も今では人々の記憶から忘れ去ろうとしている。

6 聖徳太子像　　丸田富夫

所在　越谷市東町　金剛寺蔵

聖徳太子信仰は平安時代から鎌倉時代に盛んになるが、その肖像も鎌倉時代からふえてくる。

よく見られる像は、太子二歳のときの「南無仏像」、十六歳のとき父用明天皇の病気平癒を祈る孝養像、成人姿の摂政像等であるが、本像は髪をみずらに結い袍の上に袈裟をつけ柄香炉を捧げる孝養像である。

この像は四条（しじょう）（現越谷市東町（あずまちょう））にあった妙音院にまつられていたものであるが明治の神仏分離の際慶寺となり近接の金剛寺に保管されているものである。

この像の胎内に頭ばかりの、太子自作と称せられる像が納められており、新編武蔵風土記稿にも「この像は一時故あって足立郡千住宿に移したが千住、四条の村人のなかに病気になる者が続出したので、これは太子の御心にかなわなかったと考え、再び四条にもどした」とある。

7. 寛政五年三月の諸国巡国供養塔など

(ア) 寛政5年3月巡国供養塔

増林の県道平方・東京線の傍にある巡国供養塔です。奉納 秩父、西国、坂東 為二世安楽とあり 願主の欲進、平六、弥左エ門、治郎八の四人の名が刻まれています。それぞれの観音霊場の参詣巡礼を記念して建てられたものです。寛政5年とは、1793年で、今から195年前です。越谷市金石資料集には同じ寛政5年4月の増林定使野用水傍のもの、同5月の向畑十一面観音堂境内のものと二つが出ていますが、この石塔は抜けています。宝暦10年(1760年)のものにつぐ、市内で2番目に古い巡国供養塔です。

(イ) 元文5年10月六十六部供養塔

これも増林の県道平方・東京線と古利根川の間の畑地に立つ六十六部供養塔です。

六十六部供養塔とは、全国六十六か国の寺院に法華経を奉納して歩く六十六部という僧侶の巡拝記念塔です。近世になってからは一般人も同じことを行なったようです。

大乗妙典一千巻読誦供養塔、享保14年（1729年、259年前）、元文5年（1740年、248年前）の二つの年号などが刻まれています。

これも金石資料集にはなく、六十六部供養塔としては市内11番目に古いものです。

（ウ）元文5年　庚申塔

市内大道の八坂忠氏邸内にある庚申塔で元文5年（食は年刻）建立のものです。1740年ですから248年前のものです。大道（おおみち）に現在ある石造物では市指定文化財となっているものを含む最古年代の板碑三基につぐ4番目に古いものです。これも金石資料集には出ていません。

11年前にできた越谷市金石資料集は、市史監修員荻原龍夫氏が「序にかえて」に「短期間の調査で凡そのものを収録することは出来なかった」とかいておられるように欠落があります。この強烈な時代、貴重な資料が散逸する前に「文化財の基本台帳」の一日も早い「完全整備」が望まれます。

8「越ヶ谷八景」の今昔

(一) 瓦曽根の帰帆

山田　政信

瓦曽根の溜井を背景とした景色は、自然の公園であつた。元荒川の流れを左右にひろげ、その中に、水の差引をする堰を設けて、用水の季節にはあたかも一湖沼の如くであつたという。明治初期に越谷町(市)の山本梅塘はここに近江八景になぞらいて、近隣の情景を選んで、「越ヶ谷八景」を見立てた。曰く、

瓦曽根の帰帆・水神の落雁・東福寺の秋月・久伊豆の暮雪・柳原の夜雨・大相模の晴嵐・寺橋の夕照・天嶽寺の晩鐘の八景である。

瓦曽根の帰帆は、当時の重要な交通機関である川舟が、米・野菜などを運び、瓦曽根の河岸場で荷を積みかえて上流に帰る夕暮れ時、川面に数多くの帆舟が浮かぶ情景は、のどかで風情のある光景であつたという。

この溜井図は、八景の一瓦曽根の帰帆を偲ぶべく掲出したものであります。溜井図を描

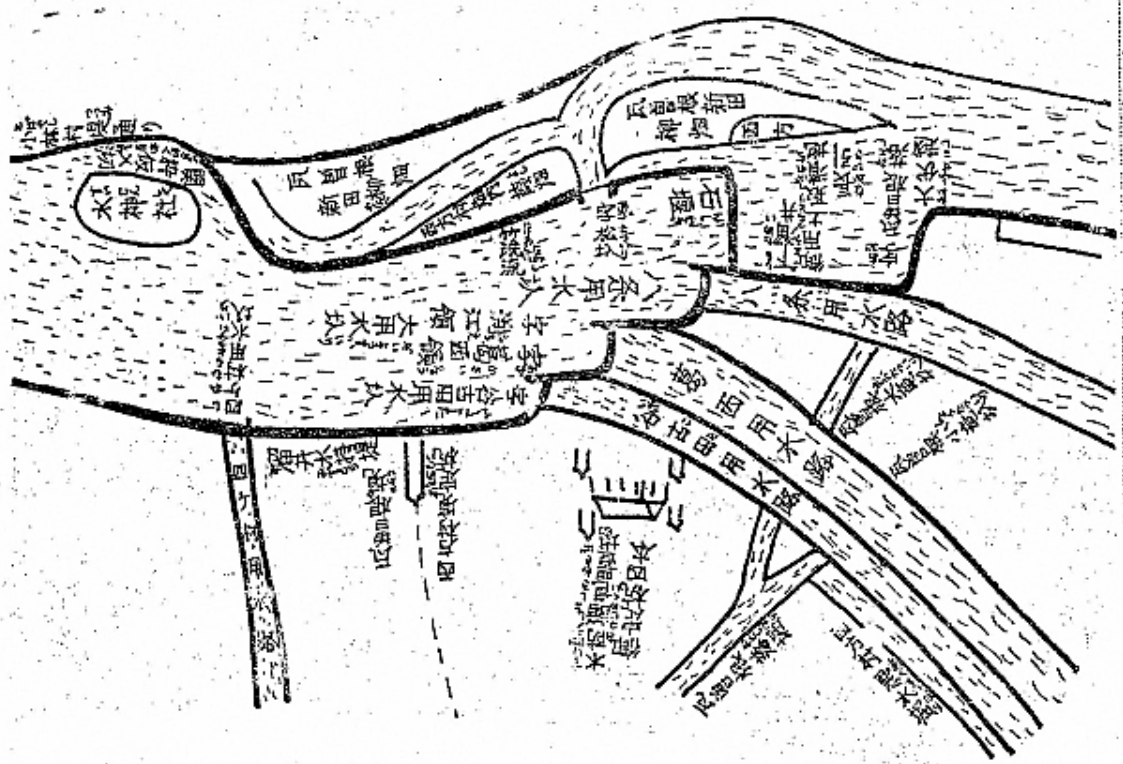
いたであろうと思はれる地点より現状を眺めてみても、急激な都市化の波により急速に変りつつある現在、八景も当時を偲ぶことのできないのは残念であります。

この溜井図を画いた鳥文斎栄之（一七五六～一八二九）は、狩野栄川院典信に画技を学び、後に浮世絵師に転向した。栄之は宝暦六年旗本細田家の長男に生れ、十代将軍家治に仕え小納戸役を勤めた。旗本出身の浮世絵師はきわめてまれな例であろう。

また、この溜井図は、故中村裕彦氏が市に寄贈されたもので現在市立図書館に保存されている（昭和五〇年市の文化財に指定）。中村家は代々氏曽根に居住して名主を世襲し、天明四年には苗字帯刀御免の身分に、寛政一二年には五人扶持を与えられた家柄であったので栄之と親交があったのであろう。

（今回の出品に際して、図書館のご厚意により撮影の許可を得たものであります）

江戸時代後期の頃と思われる瓦曽根溜井の絵図



お願い

丁越ヶ谷八景」の写真・図等は現在散逸しており発見も困難です。資料及情報等をお持ちの方がおりましたら、当会にご連絡いただければ幸いです。次回の文化祭の資料といたしたく、よろしくお願いいたします。

越谷市郷土研究会